盛唐の書が日本へ渡り、漢方の救済が代々伝わる

――『鑑真伝法東渡記』を読んで

南開大学　王奕博

万水千山を踏み、雨雪風霜を経り。寒来暑往を歴、一世の扶桑を護る。

――前書き

「百年に一度もない」コロナ禍により人々の健康不安が空前の高まりを見せ、中国医学に対する新たな議論も起きました。実は、中国の伝統医学は早くから世界に向かっており、韓国では「韓薬」、日本では「漢方」と呼ばれています。では、黄河流域に源を発する漢方薬はどのように海を渡り、日本に伝わって大きく発展したのでしょうか。鑑真和上の物語によって、この疑問に対する筋が通りました。日本の漢方と密接な関係があり、おかげで生物多様性と人類の健康の関係に対する新しい思考と認識を持つこともできました。

仏法と薬を伝え日本を救済――鑑真と日本の漢方の出会い

漢方薬はどうして日本に根を下ろしたのでしょうか。鑑真がその中で重要な働きをしています。鑑真と言えば、毅然として、仏法を日本に伝えたというのが得てして世の人の第一印象です。確かに、彼は10年もかけ、6回も日本へ渡って、友人らを失い、失明しても諦めず、最後に中日交流史上の美談を成し遂げました。しかし、慈悲深い鑑真は日本へ渡って仏法だけではなく薬も伝え、医術を田野に伝授して、日本の漢方を宮廷の貴族から庶民の人に向かわせたのです。朝廷で、鑑真はずば抜けた医術相で光明皇太后、聖武天皇を診療しました。田野では日本の当時の民間薬に対して識別をしなおしており、日本に紹介した『傷寒論』、『金匱要略』などの専門書籍は、日本の漢方医学の発展を強力に促したため、日本の医薬界で「医事の祖」と尊ばれています。一つまた一つと「鑑真」が中国の医薬の知恵を日本にもたらし、日本の民衆へと普及させたのだと言えます。

栄枯盛衰を経て、今その光芒を放つ：日本社会と付き合い溶け合った百草

鑑真はどのように漢方に影響したのでしょうか。まちがいなく、鑑真の日本

の漢方の医学の発展に対する影響は長期的なものです。鑑真が日本にもたらした数十種類の処方のうち、「奇効丸」などの処方はほとんど日本民間の常備薬となり、江戸時代まで、薬の包みに鑑真の胸像を刷って本物の証明としていました。鑑真の後、漢方医薬は継続的に発展し、粘り強い生命力を見せています。数百年を経て中国医薬の文化を学習、吸収し、日本国内の医薬文化の意識が目覚め始めました。『医心方』、『万安方』といった日本の特色ある漢方医学書が現れ、多くの医学家、学者が学習経験を具体的な実践と結び合わせるようになり、古方派、後世派、折衷派という三大主要流派に発展しました。明治時代の「滅漢興洋」運動で一度は当時「陳腐」とされた漢方医学は深刻な打撃を受けましたが、のちに和田啓十郎、湯本求真らの努力により漢方医学が改めて日本の民衆に認められ重視されるようになりました。

漢方は今どういう状況でしょうか。時代は肯定的な答えを示しています。こんにちの日本の漢方医薬は、伝統の知恵を留めたうえで、標準化と科学化の面では時代とともに進んで、国民の社会生活の中で不可欠な構成部分となっています。新型コロナのパンデミック以降、中高年で「五苓散」、「葛根湯」などの常用される煎じ薬を家庭に備え付ける人が増えました。テンポの速い現代社会では、たくさんの若い日本人も漢方薬を不安の緩和に試み始めており、薬の材料を購入して「酸梅湯」、「秋梨湯」を自作するのが若者の間で「養生ブーム」となっています。「物それぞれに性質があり、性質はそれぞれ役に立つ」こそ、日本の漢方が千年も衰えない精髄のありかです。

小さな薬草、大きなエネルギー：人の健康は生物多様性と共に育つ

次々に生える薬草は、実は生物多様性と人の健康との密接な関係を示しています。「万物はおのおの和を得て生じ、おのおの養を得て成る。」人と自然の調和がとれた共生は、中国伝統医学、日本の漢方がずっと共有している健康の理念です。「生物多様性条約」の締約国が増え、生物多様性と人の健康がますます重視されつつある今、密接に関連する伝統医学の民間薬はおのずと新しい発展があるはずです。百草薬を飲み、黄河の水を飲んで育った自分にとって、いつもにぎわいのある医聖祠、よく先生から話に聞く張仲景が中国医学に対する第一印象です。人々の中国医学の文化に対する興味が強まるにつれ、郷里の医

聖文化園は全世界に向けた中国医学の聖地と世界の中国医薬の文化的ランドマークを目標に建設が進んでいます。そして「国の大医」に対する人々の期待に応えるため、計画に含まれる張仲景中国医学大学などの高等教育機関が、中国医学を発揚し、国民に利益をもたらす使命を負っています。生物多様性と人の健康は運命を共にしており、生物多様性を保護することが実は人の健康を保護することだ、と小さな薬草が教えてくれます。

初め弟子を説得して共に日本へ渡るため、鑑真は長屋王子が「山川異域　風月同天　寄諸仏子　共結来縁」と刺繍した袈裟を中国の多くの僧に布施したことに言及していますが、これは中日の間の友好交流を代表するものです。千百年ののち、「山川異域　風月同天」の八字が記された物資の箱が日本から中国に届き、日本の友人の健康への関心と誠実な祈りを伴って、コロナ禍と戦う中国の人々を励ましました。時代は異なるものの、共通しているのは中日交流の実践、さらには生物多様性と人の健康に対する深い関心です。」

千五百年前、鑑真は弟子からの安全への心配、不確定性に満ちた未来への周囲の心配に直面して、「仏事のためだ、どうして命を惜しむものか」と答えました。それから盛唐の書が日本へ渡り、漢方の救済が代々伝わるのです。

『鑑真伝法東渡記』を閉じ、鑑真の波乱に満ちた一生を反芻しました。日本語専攻の大学生として、多くの人から日本語の専門の発展、未来の就業などの面の心配を聞いたことがあります。「日本語はカルデラだ」の類の言葉はインターネット時代の今や至る所に見られ、自分も当惑したことはあります。しかし、鑑真が一生で直面した非難と受けた挫折を思えば、目の前のためらいなどものの数ではありません。世の中に入り乱れている他人の受け売りよりも、中日の友好交流、両国の間の文明の相互参照のほうが、進路として魅力的なのです。

中日の交流、人の健康の現在と未来に向き合い、「これを使命として、決して辞さない」というのがためらいのない回答です。せっせと探求に励み、自分の力を両国の新興に捧げたいと思います。筆をとった黎明の時分には星明かりが点々としていました。もしかすると今の星の輝きも鑑真の肩をこぼれ落ちたものでしょうか。私も自分の星を見つけられました。i

[i]読んだ資料と書籍：

[1] 雷勇、鑑真[M]、北京、中華書局、2022 年版。

[2] 余日昌、江蘇暦代名人伝記叢書・鑑真[M]、江蘇、江蘇人民出版社、2015 年版。

[3] 余大慶、鑑真伝法東渡記[M]、浙江、浙江教育出版社、2008 年版。

[4] 真人元開、鑑真和尚東征伝（梁明院校注）[M]、北京、商務印書館 中国旅遊出版社、2016 年版。

[5] 趙永旺、柏瑩、劉崢嶸ら、日本漢方医薬学発展歴程対我国中医薬学発展的啓示[J]、湖南中医薬大学学報、2018,38(05):601-604.

[6] 李浩娜、馬承厳、張正光、日本漢方医薬的暦史教訓与中医薬現代化問題思考[J]、中国中医薬信息雑誌、2012,19(01):6-7.

[7] 株式会社ツムラ「漢方の歴史」

https://www.tsumura.co.jp/kampo/history/index.html

検索日：2023 年 9 月 24 日

（本文計 1974 字）